

## 障害児教育における指導の心得

～私の障害児教育再考―教育実習生から学んだもの～

原 宏

### I はじめに

この養護学級での教育実習を終えてまず思ったことは、障害児教育実習を経験して、本当に良かったなあ。この経験がなかったら私はきっと冷めた感情しか持たない事務的な先生にしかたれなかったのではないかと、ということです。前回(中学校体育)の教育実習を終えた時も、得たものがたくさんあり、貴重な体験ができたと思っていましたが、今回の実習はその何倍も、何十倍も私にとって大切なことを学んだ気がしています。(平成1年度実習生 M. M)

すべてが初めての経験といってもいいぐらいに、何の知識も持たずに始まった実習。どれほどたくさんの不安が私の心の中にあっただろう。そんな中でまず最初に私を悩ましたのは、生徒とのふれあい方であった。発声の難しい生徒の呼びかけにどう対応したら良いのかわからなかった。しかし、それは、毎日の生徒とのふれあいの中で身体で感じとっていくものだということが分かってきた。次に教案についてだが、生徒の実態を教案の中に組み込むということだ。実習中は、ただその欄に書きさえすればいいと思うのが先になってしまった。しかし、授業をひとつ終えるごとに、教師が個々の生徒の実態を把握していないと授業がなりたないことを痛感した。教案の展開にしてもそれは理想の流れを書いたものだと思いたくなるぐらいに現実には難しい。なぜ難しいのか。それは、やはり生徒の実態を把握していないからであって、実態を見越した展開でなければならぬのだ。授業の見通しが立たない。最大の悩みはこれだろう。

(平成3年度実習生 T. M)

これは、ある教育実習生の実習後の反省録である。

本学級では、毎年秋になると7～9名の教育実習生が実習する。実習後の感想を聞いてみるとおおよそ次のようである。

- ・ 三週間は長いと思っていたけれど終わってみると実にはやかかった。やっと子どもたちが見えかけてきた所で、お別れするのがとても残念だ。
- ・ 自分の人生観、教育観が変わった。障害児教育の実習を行って本当に良かった。
- ・ 障害児も同じ人間なんだ。みんな明るくて、素直でかわいかった。楽しかった。
- ・ 授業の難しさ、教育の難しさをつくづく身にしみて感じた。

中でも、「授業の難しさ」、「教育の難しさ」については、子どもたちの前に立つようになって10年がたとうとしている私も、常に感じていることである。教育実習中は、指導教官という立場から実習生に助言をしてきたものの、私自身に障害児教育に携わる教師として、どれだけの指導力量があるものか、甚だ疑問である。

そこで、教職生活10年を一つの節目に、これまでの教育実習を通して、実習生たちと共に悩み、語り合ってきたことをまとめ、障害児教育について再考してみたいと考えた。

## Ⅱ 目 的

教育実習活動を通して、障害児教育における授業のつまづきの原因を探るとともに、より良い指導のための手だてを探求する。

## Ⅲ 方 法

1. 実習日誌の反省録から、授業にかかわる反省を抽出する。
2. 研究授業の記録と反省会から授業技術にかかわる反省を抽出する。
3. 実習後のアンケート（障害児教育実習から学んだこと）結果を内容別にまとめる。

## Ⅳ 結 果

### 1. 実習日誌の反省

教育実習生たちは、授業のつまづきの原因について、どのように考えているのであろうか。

昭和61年から平成3年度までの実習生47名の実習日誌から拾い上げまとめると、およそ次のようになる。

- ア、生徒一人ひとりの実態を十分把握できていなかった。
- イ、導入の部分で、生徒を授業に引き込むことができなかった。
- ウ、生徒の能力、実態の差が大きく、ねらいをどの子のレベルに絞ってよいかわからなかった。
- エ、生徒の能力、実態の差が大きく、どの子にも適した対応や配慮をすることができなかった。
- オ、自分を生徒のレベルまで下ろして対応することができなかった。
- カ、教師がすぐに対応してしまう。待つことができなかった。
- キ、教育実習生同士のチーム・ティーチング
- ク、教材研究不足

### 2. 研究授業の反省

これは、前期に一度中学校体育で実習を体験した4回生の本学級での授業である。

本学級では、毎年秋になると、教育実習生と一緒に「ハゼ釣り遠足」を実施している。

その事前指導（2 / 2時間）である。

(1) 指 導 案

## 養護学級生活単元学習指導案

日 時：平成3年10月2日（水） 5校時

指導者：◇藤 ◇紀

場 所：集会室、中庭（雨天時、集会室）

1. 単元名 『ハゼ釣り遠足をしよう』

2. 目 標 ① 宍道湖の秋に親しむ。

② ハゼ釣り遠足を通して、釣りの楽しさを味わう。

3. 基 盤

(1) 本学級は17名で構成され、うち男子9名、女子8名の個性豊かな学級である。2年生以上は、毎年行われるこのハゼ釣り遠足を経験している。昨年も、教育実習生と楽しく一日を過ごしたようだ。みんな、この時期になると、ハゼ釣り遠足を楽しみにしているように思われる。

(2) 前述のように、このハゼ釣り遠足は、教育実習生との恒例の行事として、ここ数年続いている。9月になると、秋の風物詩のひとつとして、マスコミで紹介されるほど、宍道湖のハゼ釣りは手軽に楽しめるようになる。そのため、とかく生活経験の乏しくなりがちな生徒たちに、この時期戸外にでて、釣りの楽しさを味わわせることは、経験の拡大を図ることに合わせ、季節感を感じ取らせるには格好の場である。また、この時期のハゼ釣りは誰でも釣ることができ、技術的にも簡単なため、魚釣りの楽しさを誰でも体験できる点で適切な題材といえる。

(3) ハゼ釣り遠足を楽しませるということを第一の目的として考え、危険につながることを以外はできるだけ生徒に対して口出しせず、和やかな雰囲気の中で過ごさせたい。

また、生徒は魚釣りの経験が少ないと考えられるので、あらゆる面で戸惑うことが予想されるが、釣ったという喜びをより大きくもたせるためにも、生徒の実態に合わせてできるだけ援助を少なくするように心がけたい。危険が伴うことが多いと考えられる行事なので、道具の扱いや、水際での行動等には、指導する側としては十分注意を払い指導したい。

## 4. 生徒の実態とねがい

氏名	実 態	ね が い
I・Y 男	おとなしくみえるが、リーダーとしての力はあると思われる。	しっかりみんなの世話をして楽しんで欲しい。
S・H 男	行動全体はスローペースではあるが、言われたことは理解できる。	釣りを楽しんで欲しい。
O・A 女	人の世話がよくでき、行動が活発である。指示をきちんと守る。	自分のことだけでなく、人の面倒も見て欲しい。
S・M 女	行動的であるが、自分の意志表示をすることが苦手なように思われる。	釣りを楽しんで欲しい。
M・M 女	発表をするのは好きであるが、言語力が乏しい。	釣りの楽しさを知って欲しい。
Y・K 女	活発であり、理解力はあるが人前で話すことが苦手である。	みんなの世話をしながらも釣りの楽しさを知って欲しい。
A・S 男	運動能力に優れており、理解力がある。魚釣りは夏休みにも行った経験がある。	自分で準備、処理し、人の世話もして欲しい。
T・S 男	何事にも興味・関心があるように思われるが、あまり深く追求しようとはしない。	指示にきちんと従って欲しい

M・A 男	おとなしいが、リーダーとしての力を持っている。	人の面倒を見ながらも自分も楽しんで欲しい。
I・T 男	落ち着きに欠け持続力が乏しいが、理解力はあるように思われる。	面倒くさからずに釣りを楽しんで欲しい。
O・A 男	理解力があり、見通しをもって行動できる。リーダーとしての力をもっている。	みんなをひっぱりながら、自分も楽しんで欲しい。
H・K 男	言語を介しての意志表示が困難であるが、自分の世界というものをもっている。	みんなと楽しく釣りを楽しんで欲しい。
U・K 女	積極的に取り組もうとするが、好き嫌いがある。人の面倒をみることができる。	みんなと仲良く一日を過ごして欲しい。

## 5. 指導計画（全8時間）

- ・ 導 入 「ハゼつり遠足をしよう」…………… 1時間
- ・ 準備計画 「準備計画を考えよう」…………… 1時間（本 時）
- ・ 展 開 「遠 足」…………… 5時間
- ・ ま と め 「まとめをしよう」…………… 1時間

6. 本時の学習

(1) 目 標

- ・ 魚釣りゲームを通して、遠足に対する期待を高める。
- ・ 大きさの概念を知る。

(2) 展 開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	準 備 物
1. 前時の授業の内容を思い出す。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 持ち物を確認する。</li> <li>・ 1年生を中心に発言させ、思い出せない場合は、2、3年生に発言させる。</li> </ul>	ホワイト ボード
2. 行き方についての説明を聞く	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分の名前を見つけて、自分でグループに別れさせる。</li> <li>・ 目印を探しながら、地図を頼りに目的地まで行くことを理解させる。</li> </ul>	グループ分け を書いた画用 紙
3. 魚釣りゲームをする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ オリエンテーリングのグループを分ける。</li> <li>・ 3グループ一斉にスタートとし、決められた場所から一人ずつ釣りをさせる。</li> <li>・ 決められた線を越えないという約束事を守らせる。</li> <li>・ 一人一匹釣った時点で交代する。</li> <li>・ 全員が最低一匹釣るまでゲームを続ける。 笛の合図で止める。</li> </ul>	模擬竿 紙の魚
①グループごとに数を数え、順位を競う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ みんなで声を合わせて数えることで、多い少ないの意識をもたせる。</li> <li>・ 釣ることが難しい子どもがいた場合、グループ内で助け合わせ、全員に釣る楽しみを味わわせる。</li> <li>・ T、S/H、A/S、H/Y、Kは教生が補助する。</li> </ul>	バケツ
4. まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大きさ別に色分けした魚の大きさを比べて見せる。</li> <li>・ 生徒たちに発言させ、前時の約束事を思い出させる。</li> <li>・ 水際での行動・道具の扱い・行き帰りの交通等。</li> <li>・ 準備するものを確認する。</li> </ul>	ものさし

(3) 評 価



- ・ 魚釣りゲームが楽しんでできたか。
- ・ 魚の大きさが分かったか。

(2) 授業の流れ

経過時間	教師の活動	生徒の反応
0'00"	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ⑦今日は、こないだの生活の時間にやったこと覚えている人。</li> <li>・ 覚えていたら手をあげて。</li> <li>・ そう、さかなつり。</li> <li>はぜつりに行くことを田中先生授業されましたね。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ シ〜ン</li> <li>・ さかなつり</li> </ul>
0'40"	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ⑧今日は、準備というか、いかに楽しむかということで授業をやりたいと思います。</li> <li>・ それじゃあね、こないだ田中先生がみんなが持って来るものを言われましたね。</li> <li>みんな持って来る物覚えていますか。</li> <li>覚えている人手をあげて。</li> <li>・ ほかに。</li> <li>・ ほかに。</li> <li>・ そう持って行くもの。</li> <li>・ ほかに何か。</li> <li>・ Aちゃんは宍道湖で網で引くのかな。</li> <li>・ ああ、びくのことかな。</li> <li>・ そうだね、一応つりざおの中に入れて。</li> <li>・ ン、かみ?</li> <li>・ ああ、ハンカチ、ちり紙、これはいるわな。</li> <li>・ 帽子、タオル。</li> <li>・ 今言ってくれたのは、今日みたいな天気の良い日だったらいいわね。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Y：つりざお</li> <li>O：バケツ</li> <li>H：もってくるもの</li> <li>H：弁当、水筒</li> <li>I：ものさし</li> <li>O：クーラー</li> <li>M：つりざお</li> <li>A：あみ</li> <li>A：ちがう、ちがう</li> <li>O：さかなを入れる</li> <li>M：おもり</li> <li>T：かみ</li> <li>T：ハンカチ、ちり紙</li> </ul>

障害児教育における指導の心得

経過時間	教師の活動	生徒の反応
4'00"	<p>もし、雨がふったら。</p> <p>・ Aちゃんは雨がふったらちり紙でこうやって雨よけるの。</p> <p>・ あ、降り出したら中止だわね。</p> <p>⊕でもね、朝行っとって、つり出したら雨がザーと降り出したらどうしよう。</p> <p>・ そのまま濡れて帰る。 雨の中こうやって(手で頭を覆う)濡れて帰るの。</p> <p>・ そう、雨が降ったときに困るからかっぱとかか雨具がいますね。</p> <p>・ それから、まだあるかな。 もしさあ、その日が晴れても前の日に雨が降っていたら下はどんなになっている。</p> <p>・ そう、濡れてるね。Aちゃんは、みんなは濡れてる所にペタッとすわるかな。 冷たいね。ほかにいるものない。</p> <p>・ O君はこうやっていすをかかえていく。 《ジェスチャー》</p> <p>・ ありがとう。</p> <p>⊕それじゃ、今ざっと出たけど、もう一回復習しようね。</p>	<p>H<sup>㊦</sup>: 雨がふったら、ち～し</p> <p>H: ちがう、ち～し</p> <p>H: ちゅうし</p> <p>O: 帰る : 帰る</p> <p>H: いんや</p> <p>O: かっぱ</p> <p>H: 濡れてる</p> <p>A: しきもの O: いす (笑い)</p> <p>《T: 自分の椅子を教師に渡す》</p>
	<p>《もっていくもの板書》</p> <p>まず、さお がいますね。</p> <p>はい?</p> <p>何日か。</p> <p>Tちゃん いつ?</p> <p>12日。一人で行ってください。 いておこうか。</p> <p>10月何日か。</p> <p>金曜日だね。</p> <p>さあ、何日でしょうか。</p>	<p>T<sup>㊦</sup>: 何日</p> <p>T: 何曜日</p> <p>H: 木曜日 : 12日</p> <p>T: 金曜日</p> <p>H: 金曜日</p> <p>H: 木曜日</p>

経過時間	教師の活動	生徒の反応
5'15"	<p>10月木日金曜日? 4日だね。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>じゃあ、話をもとにもどそうね。 10月4日に行くわけだ。 さっきのつりざおを持ってね。 弁当、水筒、そういう準備が全部できた人手をあげて。 つりざおが準備できた人 できるだけ早く準備して下さい。 どんな針 つり針ってどんな針 《板書》</li> </ul> 	<p>O: はい、4日</p> <p>H: シーン シーン H: 針だけ H: つり針</p> <p>H: ちがう《出て板書》</p> 
7'03"	<p>あれっ、これつり針。 Aちゃんはこうやって魚をさすんだね。 (魚をさすジェスチャー) どんな形をしているかな。 そう、平仮名の「し」の形をしていますね。 持ちものはこれぐらいにしといて。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>今日は、行くときのことについて話をします。 みんなどうやって行きますか。 そう、歩いて行きますね。 それで、去年どうやって行ったか覚えていますか。 そう、歩いて行ったんだけど、みんなが集まって行ったかな。 バラバラだったよね。でもね、一人ひとりが別別で行ったわけじゃないよね。 チームになっても同じ道をこうやって(手を振りながら)歩いたかな。 そう、ひとつのチームはあちから。 ほかのチームはこっちからというふうに行ったね。今年もそういう感じでやろうと思っています。</li> </ul>	<p>H: いんやあ～ はい、はい。《指のそら書きで示す》</p> <p>S: 歩いて</p> <p>H: 歩いて</p> <p>H: バラバラ</p> <p>O: チーム</p> <p>H: バラバラ</p>



障害児教育における指導の心得

経過時間	教師の活動	生徒の反応
9'00"	<ul style="list-style-type: none"> <li>このチームで行くんですけど。今からこのチームを発表します。先生たちで相談をして決めました。《班別の名表を提示》</li> </ul>	<p>H：うさぎチーム</p>
10'02"	<ul style="list-style-type: none"> <li>みんなの名前が漢字で書いてあります。名前をみつけたらテーブルに番号を書いておくから自分でそのテーブルに行ってください。いいですか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>出歩く生徒 数名</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>《STと名表を貼る》</li> <li>みんな見てください。</li> <li>《名表を指さしながら》1班の人手をあげてください。 2班の人この人です。3班の人この人です。</li> <li>《テーブルを示しながら》1班の人このテーブルです。2班の人このテーブルです。3班の人このテーブルです。とりあえず、1～3班テーブルにわかれてください。</li> <li>名前を呼ぶから手をあげてください。 1班 A君、B君・・・ 2班 Hさん、Iさん・・・</li> <li>あれ、一人おかしいんじゃないか。</li> <li>このグループが、これから末次公園に行くまでの一つのチームです。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>《班別のテーブルに移動する》</li> <li>《IがHを他のテーブルから連れてくる》</li> </ul>
13'30"	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の班を覚えて下さい。</li> <li>そう、道が違います。 いいこと言ってくれるね。</li> <li>去年は地図を持っていったね。2、3年生の人は覚えているね。紙を見ながら行ったよね。今年も同じように紙を持って行こうと思うけど。それを大きくしたのがこれだけ覚えてる？。それに、これまではただ見て行くだけだったけど今年は違うよ。</li> </ul>	<p>H：バラバラで行く？</p>

経過時間	教師の活動	生徒の反応
17' 40"	<p>秘密があるのこの紙に。何だろう。 わからないかな。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ これはプールに行くまでの道です。 ここに変なマークがあるね。</li> <li>そう、これが今年のポイント、メインイベントです。この紙の中に問題が隠されています。この問題をやりながら末次公園まで行きます。</li> <li>・ 同じようにやりますから、要領を覚えて下さい。</li> <li>・ ここに何かあるものがありましたね。 そうマクドナルド。今日はそれが答えです。</li> <li>・ あさって行くときは、しっかりと周りを見て行ってください。問題は、言葉、色、形、何かはわかりません。問題を見てからのお楽しみ。しっかりと周りを見て行ってください。あまり周りを見過ぎて人にぶつからないようにしてください。</li> <li>・ 今日は、せっかくグループ分けをしましたので、このグループでゲームをしたいと思います。</li> <li>・ 中庭を見てください。つり堀があるね。 今日は、ここでね、魚釣り競争をしてもらいます。</li> <li>④ <u>ルールを説明します。まず、グループで競争します。竿が一本しかありません。</u> そう、一人魚一匹で交替します。釣った魚は自分で持っていてください。最低でも一人一匹は釣ってください。</li> <li>⑦ <u>水はないけど、あくまで本物の水だと思って水の中に入らないでください。</u></li> <li>・ インチキはしないでください。</li> <li>・ 先生が笛を鳴らしたら《笛を吹く》釣るのはやめてください。</li> </ul>	<p>エッ、エッ？</p> <p>H：ほにゃらら</p> <p>Y：ハイ、ハイ、ハイ マクドナルド</p> <p>《笑 い》</p> <p>何のゲーム</p> <p>エッ、エッ、エッ</p> <p>H：かわりばんこ</p>

障害児教育における指導の心得

経過時間	教師の活動	生徒の反応
26'04"	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ グループに教生の先生に一人ずつ入ってもらいます。自分で釣るのが難しい人は教生の先生に手伝ってもらってください。</li> <li>・ 先生も考えましたよ。水中人がいます。今日は泳いで取りに行ってくれます。</li> <li>・ 1班の人 田山先生 2班の人 井汲先生 3班の人 青山先生 先生の前に一列で並んで、並んだら座ってください。それじゃ外へ出しましょう。</li> <li>・ 水中人が中にひっぱりこむかも。生きて帰れないかもしれない。さっき言った約束は守ってください。ほかのチームに迷惑をかけるチームは負けになりますよ。</li> <li>・ 1班の人ここに並んで・・・</li> <li>・ いいですか。ゲームを始めますよ。 よ〜い。《笛》</li> </ul>	<p>○：竿が水の中に落ちたら</p> <p>《中庭へ移動》</p>
30'30"	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 《終了》</li> <li>・ みんなで一緒に数えてみよう。 8匹はないか。みんなあまり差がないね。 今日は一回目だったからね。もう一回やってみようね。みんなやりたい？</li> <li>・ 先生の笛が鳴るまで交替でつってください。 みんな、がんばれ。</li> </ul>	<p>全員：1匹、2匹、3匹・・・</p> <p>教生ST「やろう、やろう」</p>
42'38"	<p>《二回目》</p>	<p>寝ころがったり、他の遊具で遊び始める。</p>
44'30"	<p>⑦ 《三回目》</p>	
44'30"	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ みんなご苦労様でした。いろいろな魚がいましたね。宍道湖のハゼでもいろんな大きさの魚がいます。水の中の魚は見えません。選ってつることはできません。</li> </ul>	

経過時間	教師の活動	生徒の反応
54' 18"	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今日、先生こういうものを発明しました。 《リボンの付いたものさしを見せる》 何に使うかわかるかな。</li> <li>・ その前にね、この魚とこの魚とどちらが大きい でしょう。 こっちと思う人。《大きい魚を見せ》 こっちと思う人。《小さい魚を見せ》 そうですね。</li> <li>・ それでこれを使うとね。魚の大きさがわかるん です。 こうやってね《実演して見せる》、リボンが遠 くまでいった方が大きい魚になります。</li> <li>・ みんな釣った魚は先生の所まで持って来てくだ さい。測ってあげます。 大きい魚をがんばって釣ってください。</li> <li>・ じゃあね。ハゼ釣り大会の時に注意することを もう一回言いますよ。</li> <li>・ 宍道湖の周りで大騒ぎをしない。</li> <li>・ 人を押ししたりしないように気をつけてください。</li> <li>・ みんなで仲良く釣って、楽しいハゼ釣り大会に しましょう。</li> <li>・ 終わります。</li> </ul>	<p>ハ～イ シ～ン</p> <p>ハ～イ</p>

## (3) 自 評

ア、時間オーバーではあったが、一応予定通りの内容を押さえることはできたように思う。

イ、持ち物を、後からまとめて板書しようとしたことはまずかった。

ウ、生徒に理解しやすい言葉遣いに苦勞した。

エ、生徒の漢字が読める、読めない等、実態を十分把握していなかった。

(4) 授業後の反省会から

① 導入部分について

導入の部分では、子どもたちに、この授業で「何のために、何を、どうするのか」、学習への意欲と見通しをもたせることが大切である。導入段階での興味・関心の喚起が強ければ強いほど、課題に対する取り組みが集中して持続すると考えられる。

想起の場合は、言葉だけの説明では難しい子どもたちもいるので、写真とかビデオといった視覚的な手がかりを使いながら、また、臭いや味といった五感に訴えながら行うとより効果的である。

- ・ 《\_\_傍線アについて》 発問が抽象的である。子どもたちが考える手がかりに乏しい。発問、指示はより具体的に簡潔明瞭に行う方が良い。
- ・ 《\_\_傍線イについて》 本時の学習のねらいが抽象的で、学習への見通しがもちにくい。

② 展開部分について

その授業の中心活動である。子どもたちが、主体的に課題に取り組み、教師の手だてにそれぞれの子どもたちに合った配慮がなされており、どの子どもたちにも活躍の場が保障されている活動にしたいものである。

- ・ 《\_\_傍線ウについて》 子どもたちの発語は、構音障害などもあり、初めての人には聞き取りにくいことがある。正しく発音するように促すことは大切なことではあるが、無理に歪めず、教師が素早く理解し、対応することも大切である。
- ・ 《\_\_傍線エについて》 子どもたちにできるだけ考えさせることは大切なことであるが、回りくどい言い回しは逆に子どもの思考を混乱させる結果になる。
- ・ 《\_\_傍線オについて》 何事においても即時強化が大切である。そのためにも子どもたちの発言には、すぐに板書したり、声かけなどによって強化してやるのが大切である。
- ・ 《\_\_傍線カについて》 子どもたちの意見は大切にしていなければならないが、授業の展開に関係ない発言の一つひとつに対応しているとあらぬ方向に授業が流されてしまうことになる。「それはあとでね」といった対応や、聞き流す勇気をもつことも大切である。
- ・ 《\_\_傍線キについて》 ルールなどは、箇条書にまとめたものを提示しながら、その場で具体物を使って説明した方がより効果的である。
- ・ 《\_\_傍線クについて》 子どもたちは、見立てることがなかなか難しい。例えば、水色のシートを張るといった、より具体的にリアルに提示する方が理解しやすい。
- ・ 《\_\_傍線ケについて》 子どもたちはとても正直である。同じパターンで何度も行うと飽きてしまう。その都度の評価や次回目標、留意事項など、助言を与えることによって子どもたちの意欲を高めるように配慮することが大切である。

## 《その他》

- ・ 教師主導型で、学習活動としての広がりが感じられない。
- ・ 一見活発な授業展開ではあるが、特定の生徒の発言によって授業が展開されている。全員に授業への参加意識をもたせるためにも、メモ用紙などを持たせ、記入させると良い。

## ③ まとめの部分について

その時間で、自分たちが何をしたのか、何ができたのか、成果や達成感が実感できるまとめにしたいものである。

- ・ 内容が多すぎ、生徒も消化不良である。少ないかなと思うぐらいの内容でちょうど良い。
- ・ この授業で何を学ばせたかったのか、教師自身のねらいを再確認すべきである。

## 3. 実習後のアンケートの結果

ここ3年間、実習生に教育実習後「障害児教育で学んだこと」というテーマで、生徒や指導教官、あるいは実習生同士から学んだことを、自由に箇条書にしていだいでいる。

以下、内容別にまとめたものを示す。

## 《生徒について》

- ・ 逃げる生徒を、「こらまてー」などと言いながら追いかけても、おもしろがってよけい逃げる。
- ・ 教師の顔色に、生徒は敏感に反応する。
- ・ 導入段階で盛り上がった授業には、生徒の集中力もかなり持続する。
- ・ 生徒は、自分の役割を与えられると生きてくる。
- ・ 音楽には、からだを動かすことを促進させる力がある。
- ・ 生徒は、初めてのものに対して、とても興味を示す。
- ・ 教師の指示よりも、時には生徒同士の指示の方が効果がある場合がある。
- ・ 生徒が教室に入っていないのは、教室の中がたのしくない（魅力がない）からである。
- ・ 生徒は褒めて動かせ。
- ・ 生徒は本気でつき合わなければ心を許してくれない。
- ・ 生徒は、つまらないことを“おもしろい”とは言ってくれない。正直に反応する。
- ・ 「わかりました」と言っても、本当はわかってはいない。
- ・ 生徒は、みたてる、想定することが難しい。
- ・ 書けること、読めること、話せることは別のこととして考えるべきである。また、数えられることと、数がわかることも別のことである。
- ・ 知識を生活の中に生かすことがなかなか難しい。
- ・ 確かな見通しをもった行動が難しい。
- ・ 授業に飽きると、自分のやりたいことをやり始める。
- ・ 生徒は素直であり、一途になりやすい。
- ・ 生徒は、たとえ小さなことでも、嬉しい時には心から喜ぶ。
- ・ 生徒は、どんなささいなことでも質問をしてくる。

## 障害児教育における指導の心得

### 《指導案について》

- ・ 授業のねらい、内容はあれもこれもとあまり欲張らない方がよい。
- ・ ねらいは、具体的かつ簡潔明瞭に書く。
- ・ 生徒の実態は、単元、題材にかかわって、具体的に書く。
- ・ 展開は、生徒の反応、行動をできる限り予測し、多角的視点から検討を加える。
- ・ 指導上の留意点は、生徒に活動を促すための手だてやその留意事項を具体的に書く。
- ・ 個人的な能力差を十分考慮して、手だてや配慮を考えるべきである。
- ・ 評価は、評価のための視点と手だてを具体的に書く。
- ・ 指導案は、教師という名の役者の台本である。
- ・ 指導案の展開にこだわり続ける必要はない。柔軟な対応も時には必要である。

### 《指導法について》

- ・ 発問は、具体的かつ、簡潔明瞭が望ましい。
- ・ 教師の発言、指示を理解できたか、確認してから次の行動に移らせることが大切である。
- ・ 授業の話法、展開にはメリハリが大切である。
- ・ 作業活動の時には、個々の作業ペースを十分考慮しておくことが大切である。
- ・ 無意味な指示、発言は慎むこと。生徒の混乱を招く。
- ・ 一度発問したら、いろいろ表現を変えない方がよい。生徒の混乱を招く。
- ・ “挙手しなければ指名しない”という約束は、その約束は守らなければ授業の混乱を招く。
- ・ 生徒の五感に語りかけるような手だてが大切である。
- ・ 授業は、生徒に“やった”、“できた”という成就感、満足感をもたせて終わる。
- ・ 絵の描けない生徒には、教師が語りかけながら気持ちを引き出してやるのが大切である。
- ・ 評価を教師がするのではなく、生徒同士でさせるとお互いの意識も高まる。
- ・ 発問や指示は、生徒の手に何もない状態で、意識を教師に向けさせてから出す。
- ・ 指示はベストタイミングを狙ってすべきである。
- ・ 一問一答方式の授業展開は避けるべきである。
- ・ 今日は何をするのか、最初に本時の授業イメージをもたせることが大切である。
- ・ 静と動が適度にある授業が、生徒は退屈しない。
- ・ 指示だけではなく、趣意説明をすると生徒も納得して行動できる。
- ・ もったいぶった教材の提示は、生徒の興味・関心を高めるのに有効である。
- ・ できるだけ、身近な話や体験と結びつけて指導すると理解しやすい。

### 《板書について》

- ・ 板書の構成をあらかじめ考えておくことも大切である。

### 《教師の態度、姿勢について》

- ・ 生徒の実態を、一日もはやくつかむことが大切である。
- ・ “つかず、はなれず”、適当な距離をおくと子どもがよく見えてくる。
- ・ 能力差の大きい生徒を対象にした授業の場合、ねらいの焦点を絞る。また、できる生徒あ

るいはできない生徒への配慮を忘れないこと。

- ・ 手がかりのない所から、なかなか自分たちで考えられない子どもたちだからこそ、できるだけ考える手がかりを与えることが必要である。
- ・ 移動を要する場合でも、細心の注意を払うことが大切である。
- ・ 子どもの発言は尊重しなければならないが、時には切り捨てることも大切である。
- ・ 教師には、環境（教室）を整え、生徒を待つぐらいの心のゆとりが必要である。
- ・ 授業（集団）に入ろうとしない生徒に、あまりかかわり過ぎてはならない。
- ・ “怒らず、譲らず” をモットーに、生徒に接する。
- ・ 誰もが一度は授業に参加できる場を、授業の中に設定するよう配慮する。
- ・ 良きにつけ、悪きにつけ、即時評価（強化）が大切である。
- ・ 自分の価値感を、子どもに押し付けてはならない。
- ・ 生徒への目標は、“もう少し頑張ればできる” という程度のものを与える。
- ・ できないことを見つけるのではなく、できることを伸ばしてやる姿勢が大切である。
- ・ “待つこと”、“がまんすること” の大切さを、集団の活動を通して身につけさせることが大切である。
- ・ 悪しき行動を非難するのではなく、その行動の原因、背景を洞察することが大切である。
- ・ 生徒が興奮しているときは、しつこくかかわらず、しばらく様子を見る。
- ・ 授業中慌てることがあっても、教師はそれを顔に出してはならない。
- ・ “できないこと” と “あまえ” とをしっかりとみきわめる。
- ・ 「よいこと」と「わるいこと」は、きちんとけじめをつけて指導する。
- ・ 学校と家庭との十分な連絡が大切である。
- ・ 授業後は、ねらいの達成度を具体的に評価する。
- ・ 作業の場合、どこまで生徒にさせて、どこを教師が介助するのか、前もって考えておく。
- ・ 授業の時間を守ることも大切なことである。
- ・ 生徒が“しないこと”を“できないこと”と思っはいけない。
- ・ 「わかりましたか。」では、本当にわかっているかどうか把握できない。
- ・ 気がついたときに、すぐにメモを取る癖をつける。
- ・ まず、教師からお手本に。
- ・ “じっと待つ” 姿勢も教師には必要である。
- ・ 教師には、授業中、生徒一人ひとりの顔が見えなければならない。
- ・ 時には、突き放す態度も必要である。
- ・ 生徒の望みを、やりたいことを実現させてやれる授業作りが大切である。
- ・ 教師自らが、まず楽しむ、やってみたい授業でなければならない。
- ・ 甘やかすことと、優しいことは別のものである。
- ・ 生徒を先入観で決めつけて見てはいけない。
- ・ できることは待ちながら、できるだけ自分たちの力でさせる。



## 障害児教育における指導の心得

- ・ 生徒の良い所（長所）を認め、伸ばす指導を心がける。
- ・ 誰もが参加できる場が設定された授業を、心がけるべきである。

### 《教材・教具について》

- ・ 授業では教材・教具を有効に組み立てる。
- ・ 自信もてる教材・教具を作ること。しっかりした教材・教具は、教師を助ける。
- ・ 日記も生徒を知る上で、重要な手がかりを与えてくれる。
- ・ 授業で使用する視聴覚機器は、そのセッティングや操作方法にも十分配慮する必要がある。
- ・ 教材、教具は生徒の興味・関心、生活にできるだけ即したものがよい。
- ・ より本物に近い教材の方が、それだけで説得力がある。
- ・ 危険な教材、教具は、個数をしっかり把握し、渡すタイミングを考えて、使い終えたらすぐに回収する。

### 《T・T（チーム・ティーチング）方式について》

- ・ CTとATは特定の子どもへの対応について、共通理解をもっておくことが大切である。
- ・ CTよりもATの言動によって授業の流れが変わることがある。
- ・ ATの役割は、子どもの視線まで下りて、CTに指示や発問をもう一度させたり、子どもの気持ちを授業に向けさせるように促す。

### 《その他感想》

- ・ 障害者と健常者との交流をもつことは、障害者に共感してくれる場を与え、理解、支援してくれる人を育成することができる。
- ・ 交流を深めることにより、子どもたちの世界を広げてやるのが大切である。
- ・ 障害はひとつの個性である。
- ・ 教科的内容は、教科書によらず、普段の生活の中にも溢れている。
- ・ 教師は生徒に教えるだけでなく、生徒から学ぶこともまた多い。
- ・ 授業の結果は、生徒の表情や態度を見ればよくわかる。
- ・ 資料の保管も大切な技術能力である。
- ・ 授業は生き物である。教師の臨機応変な対応が大切である。
- ・ あいさつは、様々な場面において大切である。

## V 考 察

このように、わずか三週間の実習期間中に障害をもった子どもたちに接するのは初めてという実習生（学生）ながら、私たちと同じように思い悩み、そして実に多くのことを学び、的確にまとめている。

実習生の言葉を借りて言えば、「やっと子どもたちが見えかけてきたところでお別れするのは、とても残念」ではあろうが、私たちに多くのことを教え、気づかせてくれた。

感謝するとともに、私たちが、彼ら実習生たちの思いを、日々の学級指導、これからの障害児教育に生かしていかなければならない。

## Ⅵ おわりに

「特殊教育は、決して学ぶ子どもたちが特殊なわけではない。現場での教師の活動は、何等変わる事のない普通教育である。ただそこに、学ぶ子ども一人ひとりに対する特別な配慮があるから特殊教育というのだ。」と、ある本で読んだ記憶がある。

また、「障害児教育は教育の原点である。」ともよく耳にする。

この二つの言葉が共通に言わんとすることは何か。

私なりの解釈をすれば、それは『まずはじめに、子どもありき』ということではないかと考える。

- ① 題材について、子どもたちの実態を把握した上で、子どもたちの興味・関心に合致したものであること。
- ② 学習展開について、子ども一人ひとりに活動の場が保障されていること。
- ③ 手だてについて、子どもたちの実態を把握した上で、それぞれの実態を考慮した配慮がなされていること。
- ④ まとめについて、子ども一人ひとりに成果が体感でき、満足感、成就感が味わえること。

など、いずれをとっても、まずその基本に子どもの存在がなければならない。

指導の心得とは、これらの基本理念を踏まえながら、子どもにとってより価値のある教授活動を支えるものでなければならないと考える。

私も、子どもたちにとってより価値ある教師をめざし、努力していきたいと思う。

まだまだ道は遠い。